

日医FAX ニュース



日医FAXニュース
編集・発行：日本医師会(03-3946-2121)

■ 地域住民支えた医師を表彰

— 日医「赤ひげ大賞」 —

長年にわたって地域住民を支えた医師を表彰する「第13回日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式が2月21日、明治記念館（東京都港区）で行われた。

大賞受賞者は、▽中村伸一（福井県医推薦、おおい町国民健康保険名田庄診療所長）▽早川富博（愛知県医推薦、愛知県厚生農業協同組合連合会足助病院名誉院長）▽中村正廣（大阪府医推薦、中村クリニック理事長）▽高垣有作（和歌山県医推薦、国保すさみ病院顧問）▽間部正子（熊本県医推薦、間部病院理事）の5氏。

このうち高垣氏は、2055年の日本の高齢化率予測にすでに達している和歌山県すさみ町で、永続的なセーフティネットを構築するため、さまざまなことに取り組んできたと説明。地域包括ケアを小さく分割して提示すること、地域のコミュニティーを維持すること、生涯働ける場を残すことが重要だと指摘した。「私個人ではなく、共に働いた同僚や行政、住民の方の皆でいただいた賞だ」と喜びを語

った。

●「医療を超えた患者との信頼関係に敬意」

主催者として挨拶した日医の松本吉郎会長は、「受賞者はいずれも地道に、そして献身的に医療活動に従事してこられた。先生の顔を見ただけで元気が出るような、医療を超えた患者との信頼関係の中で地域を守ってこられたことに敬意を表する」と祝辞を述べた。

今年は団塊の世代が全員75歳以上になる年とした上で、「住み慣れた地域で健やかに暮らし続けられるよう、医師は街づくりの一翼も担っている」と指摘。日医として、こうした活動を引き続き支えながら地域医療の充実に寄与する考えを示した。

●「人生の全てをかけたパートナーが医師」

表彰式には、石破茂首相も出席した。「今回受賞された方々は、それぞれの地域で医療に貢献され、地域住民に安心を与え、頼みの綱であり心のよりどころとなっている」と祝意を示した。「人々にとって医術だけではなく、人生の全てをかけたパートナーというのが医師であり、本日受賞された方々なのだろう」とも述べた。

式後のレセプションには、秋篠宮ご夫妻が出席されたほか、福岡資麿厚生労働相が祝辞を述べた。 【メディファクス】

■ 小学生らが「小児科医」体験

— 日医パビリオンがオープン —

日医などが、キッズニア東京（東京都江東区）に期間限定で開設した「診療所パビリオン」が2月21日、オープンした。初日は、校外学習で来場した小学生らが小児科医に扮し、

乳児健診と予防接種を体験した。

子どもたちが正しい医療行為や予防接種の効果を学び、健康に対する意識を高める機会を提供することが狙い。3月13日までの限定で、日医とキッズニアの企画・運営を行う「KCJ GROUP」が共同で手がける。2023年10月に「臨床医」をテーマとしたパビリオンを出展し、今回は2度目となる。

子どもたちは、小児科医から研修を受けたスタッフから仕事内容について学んだ後、研修医や看護師が実習などで実際に用いる医療人形を使って、小児科医の仕事を疑似体験した。乳児健診では、聴診器を用いた心音や大泉門の確認などを実施。予防接種では、小児科医役と保護者役に分かれ、問診票を確認しながらワクチン接種が可能かどうか診断し、予防接種を行った。

体験後、特製の「医師資格証」が交付されるとともに、「給料」として専用通貨の10キッズを受け取った。

●「小さい頃に同じことをしてくれていた」

パビリオンを訪れた大田区立入新井第四小学校（東京都）の6年生4人は、体験を終え、以下のような感想を話した。「実際に注射してみて、お医者さんがいろいろ考えながら注射してくれていることを知った」「聴診器を当てる部分は、決まっていなかったかと思っていただけ、ちゃんと決まっていることを知りびっくりした」「自分は覚えていないけれど、小さい頃に今日体験したのと同じことをやってもらっていたんだなと思い、感謝した」。

●松本会長、釜范副会長が視察

初日は日医の松本吉郎会長と釜范敏副会長

ら役員が視察に訪れた。記者団に対し、松本会長は小児科医をテーマに選定した狙いについて、「子どもたちにとっては、一番身近に感じられる診療科。病気を診るだけでなく、成長の見守りや予防といった役割を担っていることを知っていただき、体験いただければと考えた」と説明した。

釜范副会長は、小児科医の立場から「予防接種を受ける側は『痛くて嫌だな』と思うだろうが、実際に注射する時にはいろいろと注意すべき点があることを知っていただけたと思う」と述べ、診療する側と受ける側の両方を体験することの意義は大きいとの認識を示した。

【メディファクス】

■「将来の小児科医」を期待

— 三原こども相がパビリオン視察 —
三原じゅん子こども政策担当相は2月25日、キッズニア東京（東京都江東区）に日医などが開設した「診療所パビリオン」を視察した。視察後に記者団の取材に応じた三原氏は、子どもたちにとって良い体験になるとして、「ここに来ている方から将来の小児科医が生まれることに大いに期待したい」と述べた。

パビリオンでは来場した子どもたちが小児科医に扮し、研修医や看護師が実習などで実際に用いる医療人形を使って、予防接種と乳児健診を体験できる。3月13日までの期間限定出展となっている。

三原氏の視察には日医の松本吉郎会長が同行し、パビリオンの取り組みについて説明した。

【メディファクス】

■ 要介護認定短縮、公表内容を了承

— 認定審査期間の平均値など —
厚生労働省の社会保障審議会・介護保険部会（部会長＝菊池馨実・早稲田大理事）は2月20日、要介護認定の期間短縮に向けて公表する自治体実績の内容を了承した。認定審査期間の平均値のほか、認定調査の依頼から調査実施までの「認定調査所要期間」なども公表する。

認定審査期間などは、今年度中に厚労省のサイトで公表する。介護保険総合データベース(DB)を活用して把握し、全国、都道府県、市町村ごとの状況が分かるようにする。

公表するのは認定審査期間と認定調査所要期間のほか、自治体の依頼から主治医意見書を入手するまでの「主治医意見書所要期間」、認定調査票と主治医意見書がそろってから介護認定審査会を開くまでの「介護認定審査会等事務処理期間」。

●法定内の自治体踏まえ「参考値」も

2023年度に認定審査期間が法定の30日以内だった自治体の平均を参考に、各期間の参考値も定めた。具体的な参考値は以下の通り。
▽認定調査所要期間＝7日以内▽主治医意見書所要期間＝13日以内▽介護認定審査会等事務処理期間＝12日以内。

大西秀人委員（全国市長会介護保険対策特別委員長）は「課題や解決への取り組みも併せて周知していただきたい」とし、公表される日数が一人歩きをしない工夫を求めた。

江澤和彦委員（日医常任理事）は、要介護認定の期間短縮には、関係機関・団体の相互協力が欠かせないと主張した。「今回の

数値はあくまで参考の参考」だと述べ、自治体での取り組みを検証し、各期間について再設定することを提案した。

【メディファクス】

■ 医学会総会、27年に大阪で

— 澤会頭「良き未来のため議論」 —
日本医学会は2月21日の会見で、2027年3～4月に大阪市内で開催予定の第32回日本医学会総会の概要について説明した。総会会頭の澤芳樹氏（大阪大大学院特任教授）が、「危機を生き抜く知の視座から、今後の社会と生き方における医学の在り方、より良き未来の選択のために議論をしたい」と意気込みを語った。

主テーマは「医学のレジリエンス～みらいへの挑戦と貢献～」としている。産業医セッションを強化するために産業保健委員会を新設する。特別講演には現時点で▽山極壽一氏（総合地球環境学研究所長）▽山中伸弥氏（京都大iPS細胞研究所名誉所長）一らが登壇予定だとした。

澤氏は「本格的な準備を進めて、期待に応えられる集会、展示を開催したい」と語った。日本医学会長の門脇孝氏も「社会における医学医療の在り方について、社会と重要な接点を持ち、社会と対話することも総会の大きな役割だ」と強調した。

会場と会期は次の通り。▽学術講演会＝中之島エリア・4月23～25日▽学術展示＝中之島エリア・4月22～25日▽市民展示＝うめきたエリア・3月20～28日—。

【メディファクス】